女神の末裔　終章

第五章

闇のなかにオウスの皇子(みこ)は腕を組み、薄く笑みを浮かべて立っていた。

イナビは阿礼(あれ)に問うた。

「ヤマトの大王家の皇子か」

阿礼は頷(うなず)き、イナビの腕から降り立った。よろめくようにオウスの皇子に近づいた。

阿礼は、今にも崩れ落ちそうに節々が張り裂け痛む四肢を懸命にまっすぐに伸ばしてオウスを見据え、右腕をあげて指さした。

「禍々(まがまが)しき皇子よ。何の命を受けて国栖(くず)へ来た」

「汝(なれ)は史人(ふひと)か」

オウスは悟ったように言った。

「アダヒメはいずくに」

「それを知って如何する」

「殺す」

オウスは平然と言い放った。サヤが身構えた。剣は帯びていないが、女童(めのわらわ)のように小さく痩せたオウスの皇子ならば、素手でも倒せるだろう。

「タケヒコ」

オウスが闇に向かって言った。二つの人影が現れた。サヤは小さく叫んだ。
マユワが唇を噛みしめて立っていた。その背後にタケヒコが、マユワの首筋に短剣を突きつけて立っていた。
「土蜘蛛の乙女よ。汝の母であろう」
オウスは赤い唇を歪めて言った。
「吾に従わねば汝の母は死ぬ」

夜が開けた。
固く戸を閉じた薄闇のなかで国栖の王は眼を覚ました。
一日、生き永らえた……。
国栖が山を捨て海に出たのは彼の祖父の代であった。海人たちは、自分たちのなかから王を選ばない。王は、外より来る。外から来た異人を「王」と崇める。土蜘蛛がヤマトの地への帰還を夢見て一族を殖やすことに専念したのに対し、国栖は狭い山奥の谷間で内紛を繰り返し、僅かに残った数名の者が南の海辺に辿り着いたのであった。折しも、海人たちは今まで崇めていた「王」を失っていた。海人たちは彼の祖父を「王」に選んだ。
彼の祖父と、彼の父はすぐれた「王」と言われた。多くのクニや邑と盟を結び、交易を通じて栄えた。父が死に、彼は「王」に選ばれた。彼が「王」となって後、交易はしだいに途絶え、海人たちは往古の貧しい生活を余儀なくされた。彼はさまざまな手を尽くした。

しかし、彼が望んだわけでもないのに、ますますクニは衰え、風紀は乱れた。敏感な彼の心は、彼を崇め奉る豪族たちの、内心の軽侮を見抜いていた。
海人たちは、病み衰えた「王」、心の乱れた「王」、そして無能な「王」の存在を許さない。外の世界から新たな「まれびと」が訪れたとき、海人たちは「王」を殺して、「まれびと」を新たな王に祭り上げる。
彼も、彼の父も、彼の祖父も、自らを日輪の女神の末裔と称していた。彼の祖父は、それが偽りであることを承知していた。彼の父は半ばそれを信じるようになった。彼は、固く自らを日輪の女神の末裔と信じ込んだ。だが、海人たちは、彼が日輪の女神の末裔であるか否かを問わなかった。彼らにとって「王」は、その資格なしと見ればいつでも殺して他の者と取り替えてもよい存在でしかなかった。
彼は「まれびと」の出現を恐れた。兵を外に遣わし邑々を焼き払った。交易を禁じた。罪人を作り上げ、殺した。殺されたくない……。恐怖が彼の脳を蝕み、心を病ませた。
祭りの場でヤマトと土蜘蛛の乙女を巨漢と戦わせたのは乱心故ではない。「王」は男でなくてもよい。海人たちは、彼を殺して彼女たちを新たな「王」として戴こうとするのを恐れた。案に相違して乙女たちは逆に巨漢を死に至らしめた。彼らは一晩中悶え、苦しみつつ死んだ。
彼は、王宮に戻るなり、蔵の薬草を集めて毒を作り、酒に混ぜた。イナビが二人の乙女を連れて来たら、毒酒を飲ませる腹だった。

彼は室の戸を開いた。海の真上に輝く朝日が差し込んできた。王宮は、木造りの小さな宅だった。宅を囲む鬱蒼(うっそう)とした樹林と、長い石段が王の威厳を醸(かも)し出していた。

石段をあがってくる者がいた。イナビと二人の乙女ではなかった。

「何者か」

王は問うた。石段を登り切った苔むす小庭に、色白い華奢な少年が平服していた。

「ヤマトの大王の子、オウスの皇子」

「ヤマトの……」

王は惑乱した。「まれびと」はあの三人の女だけではなかった。

「謁見を許した覚えはない」

「許された覚えはない」

「では何故に来た」

「吾はヤマトの大王の命を受けて来た」

オウスの皇子は貌(かお)をあげ、王の足元ににじり寄った。

「アダヒメを殺せ、と」

「アダヒメ」

「二人の巨漢を殺した乙女たちもともどもに殺す」

オウスの皇子は薄ら笑いを浮かべていた。彼は、王の意図を悟っていた。なぜ王が稗田(ひえだの)

阿礼(あれ)と土蜘蛛の乙女を殺そうとしたのか、理由はどうでもよい。彼の心は、王の座にある者の不安を直観的に見抜く眼を持っていた。

「入れ」

王は言い、室の内へと入った。オウスの皇子が続き、戸が再び固く閉じられた。

再び日が暮れた。

イナビの宅では、意識を取り戻せずにうなされるアダヒメを囲んで、阿礼、サヤ、イナビ、そしてヤトが俯(うつむ)いて据わっていた。戸口に近くにマユワが黙然と座した。その背後に、忠実なタケヒコがマユワの肩に刃を首筋に向けて当てていた。

「みな、宅より出(いで)よ」

戸口で声がした。見れば、オウスの皇子が立っていた。その背後に、矛(ほこ)を構えた兵が十二人並んでいた。国栖の男兵たちだった。

「出よ！」

タケヒコが皇子の言葉を鸚鵡(おうむ)返しに怒鳴った。

イナビとヤトがアダヒメを抱き抱えようとした。オウスが言った。

「アダヒメはそのままに置いて出よ」

女たちは瞬時にその意味を悟った。

「吾を殺せ」

マユワが叫んだ。
「サヤ、汝は生き延びよ。生き延びてヤマトを討ち、国栖を討て」
サヤは唇を噛(か)んで俯(うつむ)いた。阿礼が立ち上がり、オウスの皇子に近づいた。
「オウスの皇子よ」
オウスは薄笑いを消さず、顎(あご)を軽く持ち上げて阿礼を見た。
「汝は大王に疎(うと)まれている」
「然り」
オウスは平然と答えた。
「アダヒメもまた、大王に疎まれていた」
「然り」
「何故に大王の命に従い、アダヒメを殺す」
オウスは仮面のように凍りついた嘲りを消すことなく言った。
「出よ」
宅を出た四人の女は十二人の兵に囲まれた。一人の女に三人の兵が三本の矛を突きつけた。

アダヒメは、うつ伏せに大きな背を見せていた。右の頬を床につけていた。眼が閉じられ、唇は苦しげに半ば開き、息が激しく出入りしていた。

オウスは服を脱ぎ捨てた。しなやかな白い肌に、股ぐらの黒々とした陰毛が鮮やかに対照をなしていた。アダヒメの背後にしゃがみ、貫頭衣の裾をめくった。白い尻が剥き出しになった。
「吾は汝を憎む」
オウスは一瞬、遠くを見つめるようにぼそりと呟き、アダヒメの腰に両手をあてがった。男のように固い体であった。オウスは、男根が固く鎌首をもたげるのを感じた。オウスは自らのふぐり玉を弄んだ。額から冷や汗が垂れた。眼を閉じ激痛を堪えるオウスの貌が次第に紅く染まり、呼吸が乱れた。
いまだ。オウスはい尻を持ち上げた。男のように固い体だった。
オウスは、雄大な男根の尖端をアダヒメの陰にあてがい、ぐいと腰を突き出した。

闇のなかでアダヒメは叫び声をあげた。
真二つに切り裂くような激痛が全身を貫いた。
瞼が開いた。目の前は丸太を組んだ壁だった。何者かが彼女の尻に体をつけて蠢いていた。
アダヒメは後ろを振り向こうとした。そのとき、二つの手が彼女の首にからみついた。息が止まった。

「いまだ未通女(おとめ)であったか……」
オウスは、上体を床と垂直にのけ反らせたアダヒメの首を締める手に力を込め、激しく腰を前後に動かしながら嘲るように言った。
アダヒメの頭が左右に揺れ、顎が激しく動いていた。空気を求めて必死に口を動かした。
「苦しめ」
オウスは叫んだ。
「汝がなぶり殺した男どもの苦しみを、汝も味わえ」
オウスの男根を覆う肉襞が吸いつくように圧し、それが激しい快楽となってオウスを陶酔させた。加虐の悦びがオウスの男根を震わした。精を漏らすと同時に、アダヒメを死に至らしめる。オウスは彼女の首を締める腕に力を込めた。恍惚が彼の全身をかけめぐった。オウスは眼を閉じて快楽を楽しんだ。
そのとき、彼の股間を激痛が襲った。
「ぐっ！」
オウスは呻いた。眼を開いた。アダヒメは後ろ手にオウスの睾丸を握りしめていた。オウスの両腕から力が抜けた。それにともない、睾丸に加えられる圧力がさらに増した。
オウスはアダヒメの喉から手を離した。股間に発した火が彼の全身を焼き焦がすようだった。息が詰まった。その苦しみは、高市(たけち)の津(つ)を渡った直後、土蜘蛛の女兵たちに股間を蹴りあげられたときの苦しみに倍した。

オウスは大きく咆哮した。
「汝は誰か！」
アダヒメは叫んだ。
「何故に、吾を……」
アダヒメの眼はせつなげに見開かれていた。
「何故に！」
オウスの手が最後の力を振り絞り再びアダヒメの喉を襲った。アダヒメは歯を食いしばり、睾丸を握った手に力を込めた。
オウスの睾丸は、アダヒメの掌のなかでひしゃげ、潰れた。
同時に、アダヒメの陰に突き刺さったままの彼の男根の筒先から、血と精液が迸(ほとばし)った。それはアダヒメの膣に収まりきれず、滝のように床に滴った。オウスはゆっくりと仰向けに倒れた。倒れてもなお、赤く染まった精液は噴出をやめなかった
オウスの咆哮を聞いたタケヒコはマユワを突き飛ばし、剣を抜いて宅の戸口に突進した。
「皇子！」
タケヒコは大きく叫んで戸を蹴破り、宅の内に入った。
タケヒコから解放されたマユワの行動は素早かった。十二人の兵たちは突然の事態にうろたえていた。マユワは、サヤを囲んだ三人のうち一人の股間を蹴りあげ、取り落とした

矛で残る二人を刺殺した。イナビは呆然と立ちすくむ兵の一人の眼を抉(えぐ)った。サヤは阿礼を囲んだ兵たちに襲いかかった。兵たちは次々と屍となった。

イナビの宅の内は、血と精液の饐(す)えた匂いに満ちていた。

「皇子！」

タケヒコは、仰向けに白眼を剥いて絶命したオウスの体をかき抱いた。アダヒメはぼんやりと床に座り込んで、タケヒコとオウスを眺めていた。

自分が何処にいるのか。何をされ、何をしたのか。混濁した意識と激しい肉体の痛みが、脳の働きを停止せしめていた。

タケヒコは貌(かお)をあげた。涙に濡れた醜い貌が怒りで歪んでいた。

「汝、皇子を殺したか」

タケヒコは咆哮し、剣をあげて飛び掛かった。その瞬間、アダヒメの肉体は戦士の本能のままに動いた。

タケヒコは仁王立ちとなって硬直した。アダヒメは自分の頭頂をタケヒコの股間に打ちつけていた。タケヒコが両手で股間を覆うよりも早くアダヒメは立ち上がり、タケヒコの股間をしたたかに蹴りあげた。足の甲で睾丸が平たく変形した。

タケヒコは悲鳴をあげて倒れ、うつ伏せに股間を両手で抑えて悶絶した。アダヒメはタケヒコの剣を拾い上げ、その尻に刺した。切っ先が肛門から腸を抉って心臓に達した。

タケヒコは絶命した。

国栖の王がオウスの皇子に貸し与えた十二の兵を悉(ことごと)く倒した女たちが戸口に駆けつけたとき、アダヒメはタケヒコの尻から引き抜いた剣を下げて立ち尽くしていた。

「アダヒメ！」

四人の女たちは、返り血に染まったアダヒメと、二つの屍を見比べた。

「誰が……」

アダヒメは呟いた。

「誰が吾を殺そうとした」

「オウスの皇子」

阿礼がアダヒメに駆け寄り、顔の血を袖で拭いながら言った。

「オウスの皇子……」

アダヒメは焦点の定まらない眼を四囲に向けた。

「ここは……」

「国栖の王都」

「国栖……」

アダヒメは苦しげに一語一語を絞り出すように問うた。

「何故オウスの皇子が国栖の王都に……」

「大王はオウスの皇子に皇女を殺せと命じた。オウスの皇子は国栖の王と謀り、皇女を殺そうとした」
「国栖の王が吾を……」
「国栖の王は病んでいる」
「国栖の王はいずくに」
「あれに」
阿礼は石段を指さした。アダヒメは憑かれたようにイナビの宅をよろばい出た。

陰から滴り落ちる鮮血が石段に縦に長い跡をつけた。
激痛と出血が、アダヒメの意識を朧(おぼ)ろにさせていた。それでも彼女は脚を動かし、鉛のように重い体を運んだ。石段を昇り、何をなすのか、アダヒメに考える余裕はなかった。阿礼が石段を指さしたとき、そこに行かねばならない、と彼女の肉体は考え、脳が麻痺したまま彼女は石段を昇っていた。
王宮を守る兵たちが石段を駆け降り駆け登り、アダヒメに矛を突き出した。歯を剥き出しにして襲いかかってくる兵たちの形相も、獣のような雄叫(おたけ)びも、眼には入らず、耳には響いてこなかった。矛がアダヒメの腕や脛(すね)をかすめ皮膚を傷つけたが、アダヒメの眼はまっすぐに石段を昇った先に向けられていた。次々と石段を転げ落ちてゆく兵たちの悲鳴よりも、左右に生い茂る樹海が風に揺られるざわめきだけが彼女の意識に入り込んでいた。

やがて、樹木に覆いかぶされて鎮座する王宮が見えた。もはや行く手を阻む者はなかった。青白い月が、血に濡れたアダヒメの五体を照らし出していた。

戸が開いた。
国栖の王は酒杯を取り落とした。
顔かたちは見えないが、剣をさげ、血の匂いを発していた。
「誰か」
一喝したつもりだった。だが、声は怯えて震えた。国栖の王は床に落ちた杯を投げつけた。
「吾は王なり。国栖の王なり」
王はわめいた。アダヒメはぼんやりと、魚脂の燈火(ともしび)に照らされた国栖の王の死臭を漂わせる荒れた肌を見つめていた。王は立ち上がり、背後の木箱にとりついた。重い蓋を持ち上げ、なかに手を突っ込んだ。
「吾は王なり。日輪の女神の末裔なり」
アダヒメの視界に、月光に照らしだされた七枝の剣が映った。
「これぞ七枝(ななえだ)の剣。日輪の女神の末裔にのみ持つことを許された神器。邪悪なる者よ、去れ」
王は七枝の剣の切っ先をアダヒメへと向けた。

「日輪の女神の末裔……」
アダヒメは呟いた。乾いた脳の一部が水を含んだように動き始めた。
「日輪の女神……」
「死ね！」
王が突進した。剣の切っ先が腹部に突き立てられようとした瞬間、アダヒメの体が跳躍した。足が撥ねあげられた。アダヒメの傷ついた陰の激痛が全身を貫いた。彼女は悲鳴をあげて床に膝をついた。七枝の剣は宙を舞い、床板に突き立った。アダヒメはすぐさま顔をあげ、殺すべき相手を探した。
国栖の王は、室の隅の壁に背をつけ、怯えた眼を向けていた。
あとは無残な殺戮だった。アダヒメの腕が脚が動く度に、国栖の王の眼球が飛び出し、歯が床に散った。睾丸は潰れ、骨は砕けた。

石段の真下の広場は、異変に駆けつけた豪族、兵、邑の漁民たちで埋めつくされた。
アダヒメがゆっくりと石段を降り、赤く染まったその姿を現したとき、ひとびとはいっせいに膝まずき、額を地にすりつけた。
アダヒメは、彼女が海人たちの新たな「王」となったことに気づかぬまま、稗田阿礼の小さな姿を探し求めた。
「阿礼……」

アダヒメは、平伏した人々の間をよろよろと彷徨った。
「阿礼。吾は何をした……」

海は、川の匂いとは違う。阿礼は潮騒の響きに眼を向けて呟いた。塩を含んでいるせいか、打ち寄せる波が飛沫（しぶ）く度に白く砕けるのは。
しわぶきが狭い洞窟に響いた。阿礼は視線を移した。
白髪の半ば抜け落ちた老婆は、洞窟の奥に背を向けてうずくまっていた。
「嫗（おうな）よ」
イナビは老婆の前に、真水の入った碗と果物を積んだ高杯（たかつき）を置いた。嫗は落ちくぼんだ眼でじっと高杯を見つめ、それから視線を彼女の前に居並んだ女たちに向けた。
「ヤマトの皇女か」
アダヒメは頷いた。
「新たに国栖の王となったヤマトの皇女か」
アダヒメは答えなかった。
オウスの皇子、タケヒコ、そして国栖の王を殺した夜から三日、彼女は眠った。眼が覚めると彼女は石段の上の王宮に臥していた。彼女の目覚めを聞いた国栖のひとびとが集まってきて、彼女を「王」と呼んだ。彼女が事態を飲み込むのに丸一日を要した。
「何を知りたい」

「吾は」
アダヒメは訊ねた。
「日輪の女神の末裔なのか」
アダヒメと稗田阿礼は息をひそめて嫗の口許を見つめた。その答えを知るために、アダヒメは険しい道を越え、多くの人を殺し、自らも傷ついてここまで来た。
嫗は、国栖に逃れたナガスネヒコの史人の子孫だった。ナガスネヒコの滅亡以前の史を知るのは、九十歳に近い彼女だけであった。
「それを知って如何する」
嫗の嗄(しわが)れた声が厳しく響いた。アダヒメは首を傾げた。確かめずにはおられない。彼女の心の底に堆積した思いが、知ることを欲していた。だが、今更それを知って何になるというのか。
だが、阿礼は別だった。
「吾はヤマトの史人(ふひと)である」
阿礼は咳き込み、嫗ににじりよった。
「ヤマトの大王家に伝わる史は偽りだった。吾は史人の家に生まれた。幼いころから蔵に積まれた竹簡を読み、偽りに気づいた。史人として、まことの史を知りたい」
嫗は微笑んだ。
「ヤマトの大王家が日輪の女神の末裔でないことはすでに承知か」

「然り」
「まことの日輪の女神の末裔は、ヤマトの大王が討ったナガスネヒコであるか否かを確かめたいのか」
「ナガスネヒコは……」
阿礼はさらに膝を進めた。問うた。
「日輪の女神の末裔ではないのか」
「二つの言い伝えがある」
嫗は語りはじめた。阿礼は一語も聞き漏らすまいと身を乗り出し、耳をそばだてた。
「かつて、ヤマタイというクニがあった」
「ヤマタイ」
「太古、日輪の女神の子ニギハヤヒという者が地上に降臨し、ヤマタイを開いた。ヤマタイは地上の蒙昧な民にとっては、まさに日輪であった。その恵みは民びとを富ませ、クニは栄えた。ニギハヤヒは日輪の女神から三種の神器を授かっていた。それが七枝の剣、玉璽、鏡。玉璽と鏡はミマキの大王に奪われたが、七枝の剣は国栖が持ち去り、いまこの地の王宮にある」
「では、やはりナガスネヒコこそが日輪の女神の末裔……」
嫗は、幼い史人の乙女に懐かしげな、幼い孫の悪戯を窘めるような視線を向けた。
「ヤマトの史人の乙女よ。もう一つの言い伝えがあると言うたを忘れたか」

阿礼は口を噤(つぐ)んだ。

「ニギハヤヒなどという神はおらぬ。ヤマタイは地上に生まれた人が寄り集まって邑をなし、やがて人の数を殖やしてクニとなった。その王もまた地上の人。邪悪な女王がヤマタイを継いだ。女王は自らを日輪の女神と称して兵を起こし、四囲のクニや邑を攻め滅ぼし、人民を苦しめた。攻め滅ぼされたクニの乙女が、山中で人を殺め財を掠(かす)めていた土蜘蛛と呼ばれる女たちを率いてヤマタイを襲い、女王を誅殺してヤマタイの女王となった。新たな女王もまた殺戮を重ねた。ヤマタイの地は痩せ衰えた。女王の子孫は土地を捨て、東へ向かった。そして辿り着いたのが今のヤマトの地。女王の子孫は元々ヤマトに住んでいた王を殺してクニを奪った。彼らが日輪の女神の末裔を名乗ったは、自らを日輪の女神、日の御子(みこ)と称した女王の禍々(まがまが)しい蛮行が、ヤマトの地まで伝わっていたからだ。そして再びミマキの大王がヤマトの地を奪った」

嫗は碗の水を呑み、しばし口を噤んだ。静寂が洞窟の内部を支配した。阿礼とアダヒメは凝然と瞬きひとつしなかった。マユワが口を開いた。

「では、日輪の女神の末裔などというものは」

「どこにもいない。七枝の剣とて、もとはヤマタイの女王が海を越えた北の国の王より献上された財宝の一つ。玉璽、鏡とて同じこと」

「ならば、吾等土蜘蛛が」

サヤは落ちつかないように身を揺すり、言うべき言葉を探した。

「ヤマトの地を大王家より奪い返すのは、理に合わぬか」

嫗の笑い声が抜け落ちた歯と擦れ合って奇妙な音をたてた。

「理など、考えることはない。力の強い者が敵を倒し、民を統(す)べる、それだけのこと。ヤマトの皇女よ、汝は病める国栖の王を倒した。だから民は汝を崇(あが)める。民は力強き者に従う」

「力強き者……」

アダヒメは呟いた。

「汝がヤマトを統べたければ兵を起こしてヤマトを攻め滅ぼせばよい。国栖の王で心満たされるならば、ここに留まり穏やかに暮らせばよい」

「吾は……」

アダヒメは嫗を見つめた。

「吾は、吾は知りたい」

涙が零れ落ちていた。吾は誰。吾の父親は。何故、大王は吾を疎む。何故、ひとびとは吾を憎む。嫗は問うた。

「汝が知りたいのは、汝が何者であるか、ではないか」

アダヒメは俯き、顎をかすかに動かして頷いた。

「汝が何者であるかを知るには……」

嫗は言った。

「汝の父祖が何者であるかではなく、汝に何が出来るかをこそ問え」

太陽が南天に輝いていた。

遠くから打ち寄せる白波が、浜辺で砕け、再びうねりをあげて小山のように盛り上がった。

アダヒメは眼を細めて、海の彼方を見つめた。

「イナビ」

アダヒメは問うた。

「この海を船で渡れば、いずこに着く」

イナビは答えた。

「いずこへも着く」

「ヤマトへもか」

「ヤマトへも着く」

「北の山を越えてヤマトへ行くのと、海を越えて行くのと、どちらが疾く着く」

「海を越えたほうが疾く着く」

「ならば……」

アダヒメは腰にさげた剣の柄を握りしめた。

「船を集め、兵を集めよ」

二百の兵を乗せた五十の軍船が海原に漕ぎ出された。なかでも美々しく飾られた船には、アダヒメと稗田阿礼、そしてイナビが乗り込んでいた。

それより早く、マユワとサヤは山を越えて土蜘蛛の邑に戻り、女兵たちに剣と食糧を持たせて高市の津に向かった。

百を越える土蜘蛛の女兵に襲撃された高市の津の兵は悉く殺された。土蜘蛛たちは、ヤマトから派遣された軍を打ち破り、王都へと進んだ。

一方、河内を守っていたヤマトの軍は、難波（なにわ）の海岸から上陸した国栖の軍に打ち破られた。アダヒメを先頭に押し立てた国栖の軍は平群（へぐり）の峠を越えてヤマトへと進んだ。

ヤマトの王宮は、混乱に陥った。兵たちは兵長（いくさのおさ）の命に背いて四散した。高市の津が全滅したとの知らせを受けた大王は三人の妃と皇女たちや宮女に十五の兵をつけて北に逃し、百五十の兵とともに王宮に立て籠もった。

西と南より挟撃された王宮の軍は全滅した。大王（おおきみ）は建内宿祢（たけしうちのすくね）の一族とともに姿を消した。

「この湖は何と言う」

オキナガヒメは、傍らの兵長を見やって問うた。背が高く、肩幅の広い兵長の顔には、黒々とした痣があった。

「邑の民は淡海と呼ぶ」
「淡海」
オキナガヒメは眼の前に拡がるなだらかな水面を眺めて呟いた。海を見たことのない皇后は、その美貌を無邪気に崩し、波が打ち寄せる湖を乙女のように見つめていた。
ヤマトの北の山を越えて淡海の辺に辿り着いた王妃たちの一行は、一邑に押し入って兵に剣を擬させて邑長の宅を奪い、仮宮とした。仮宮には皇后オキナガヒメと二人の宮女が入った。仮宮に近い家には、二人の王妃と四人の皇女が住んだ。オキナガヒメの仮宮は兵長が率いる九人の兵が守った。王妃たちの家は六人の兵が守っていた。
「汝は……」
オキナガヒメは、くっきりとした眼を兵長に向けた。
「名は何という」
兵長は戸惑った。若く美しい皇后に名を問われる身分ではなかった。
「オシワケ（押別）」
兵長は顔を赤らめて答えた。皇后は艶然と微笑んだ。
「剛き名である」
兵長は膝を突いて平伏した。
「礼は無用。もはや大王家は滅びた」
オキナガヒメは言葉を継いで、兵長が顔をあげ何か言いかけたのを制した。

「吾等が王宮を去ったとき、すでに兵の半数は逃げていた。いよいよ国栖や土蜘蛛の兵どもが攻め寄せれば、さらに多くの兵が王宮を捨て逃げたであろう。おそらく大王も皇子も皆、まつろわぬ民どもに殺戮されたに違いない」
兵長は俯いた。皇后を哀れと思った。皇后はすっくと背を延ばして立ち、湖を見つめていた。日の光と、湖の照り返しを浴び、その美しい姿態を際立たせた。
湖の辺で二人の宮女が水に足を浸していた。白いふくらはぎが、兵長の眼に映った。
「オシワケ」
皇后は言った。
「この邑を出よう」
兵長は咄嗟に理解できず、皇后を見た。
「いずれ、国栖・土蜘蛛の兵たちはこの邑に攻めて来る。十五の兵では戦えぬ」
「……」
「吾とともに逃げよう」
兵長は眼を見開いた。皇后は、息が兵長の髭を揺らすほどに顔を寄せた。
皇后の手が兵長の股間に伸びた。兵長の膨張した男根を、皇后の柔らかな手が撫でた。兵長は眼を閉じた。喘ぎそうになるのをこらえた。鼻孔や半ば閉じた唇から、吐息が激しく洩れた。
「吾はもはや皇后ではない。日輪の女神の末裔の威などヤマトを離れれば、なんの力にも

ならない。汝のような剛き兵こそが頼り」
皇后は兵長の広い胸板に顔を埋めた。指が激しく動いた。兵長は呻いた。股間が濡れた。
眼も虚ろに深く息を吐き出した兵長の耳たぶを、皇后は軽く噛み、囁(ささや)いた。
「吾とともに行くか」
兵長は頷いた。
「まず……」
皇后の眼が鋭く光ったのに、兵長は気づかなかった。
「王妃と皇女たちを殺せ」

九人の抜剣した兵たちが、王妃と皇女六人の住まう家に押し寄せた。家を守っていた六人の兵と二人の王妃、四人の皇女は悉く息絶えた。
返り血を浴びた兵長は、肩を激しく上下させ、いま、自らが刺し貫いた王妃の、大きく見開かれた眼を見つめた。
兵長はよろめきながら外へ出た。邑人たちは、息を潜めて家に閉じこもり、隙間から彼らの蛮行を見つめていた。兵長はふらふらと湖の辺の仮宮へと歩いた。八人の兵たちが後を追った。
階梯(きざはし)を昇り、兵長は仮宮の戸を激しく叩いた。戸が開かれた。開かれると同時に兵長は

立ち竦んだ。
三人の女がいた。紅の貫頭衣に、膝より脚を剥き出しにし、革の胸当てをつけていた。
顔は紅で隈取られ、腰に長剣を帯びていた。
「皇后……」
兵長は呆然と呟いた。中央の女兵は、たしかにオキナガヒメであった。
「王妃どもはみな、殺したか」
オキナガヒメは言った。兵長は頷いた。オキナガヒメは冷酷な笑みを浮かべた。
「汝はもう要らぬ」
オキナガヒメは兵長の股間を蹴りあげた。兵長は呻き、両手で股間を抑えて膝をついた。
オキナガヒメはその顎を蹴って仰向けに倒した。大きく広げられた股間に踵を打ち込んだ。
兵長は激痛に叫ぶこともできず、オキナガヒメのくるぶしを両手でつかみ、身を捩った。
オキナガヒメは笑い、ますます強く睾丸を踏みつけた。兵長の喉から嗄れた悲鳴が迸った。
「ふぐり玉が潰れるとき、男の精はすべて溢れ出る。日輪の女神の末裔たる吾に二度も精を漏らさしめた汝は幸せである。安らかに死ね」
兵長の睾丸は二つながらにオキナガヒメの踵の下で圧搾された。
オキナガヒメと二人の宮女は、歓声をあげて仮宮の階梯を駆け降りた。その下に控えていた八人の兵は瞬く間に屍となって転がった。

夜が更けていた。
淡海の水面に月の光が照り砕けていた。
その辺を、多くの松明の行列が進んでいた。建内宿祢とその一族に守られた大王であった。一行は、仮宮の手前で止まった。
「大王よ」
建内宿祢が悄然とやつれ果てた大王を促した。
「まずは仮宮へ」

仮宮の戸を開けると琴の音が響いた。
「皇后よ」
大王は転ぶように皇后の傍らに駆け寄り、座った。皇后はちらりと微笑み、琴を奏で続けた。大王は皇后の肩を抱こうとして手を止めた。
「皇后よ。何か言え」
皇后は、火影に薄く照らされた白い貌を大王に向け、琴を弾く手を止めずに言った。
「日輪の女神の末裔なる大王よ。西の方に韓なるクニあり」
「クニ」
「種々の珍宝に溢れるクニを汝に賜る。兵を挙げて、汝がものとせよ」
「何を言う」

大王は立ち上がった。皇后は再び琴に眼を向けた。国栖・土蜘蛛にクニを滅ぼされ、身ひとつで逃げて来たばかりである。
大王は背後に控える老人を振り返った。
「汝が孫は、ものに憑かれたか」
建内宿祢は頭を振った。
「西の方のクニを汝に賜ると言ったのではない」
汝、と呼ばれ、大王は身を竦ませた。建内宿祢の眼にただならぬ気配が漂っていた。
「何故ならば、吾が孫こそ、まことの日輪の女神の末裔」
言いおわるより早く、皇后の傍らに控えていた二人の宮女が立ち上がった。ヤスメは短剣を抜き、背後より大王の延髄を刺した。イサメが大王の股間を蹴上げ、眼を指で抉った。大王は血に塗れ、獣のように呻きながら、仮宮の階梯を転げ落ちた。

三日後。
淡海の辺を百を越える女たちが、甲冑に身を固めて進んでいた。アダヒメを先頭に、サヤが率いる五十の土蜘蛛たち、イナビが率いる五十の国栖の女兵たちであった。
辺の邑の入口に高さ三丈の竹が立てられ、尖端に大王の首が突き刺さっていた。
アダヒメは、苦しみに醜く歪んだ大王の首を凝視した。ひとすじ、涙が頬を伝わり落ちた。

「ヤマトの新たなる大王よ」
湖から吹く風が頬の涙を吹き飛ばした。アダヒメの眼前に、白髪の老人がうずくまっていた。アダヒメの傍らに随う阿礼が呟いた。
「建内宿祢……」

終　章

仮宮の床を染めた大王の血は綺麗に清められていた。
建内宿祢が戸を開けると、オキナガヒメが白絹の衣に匂玉を美しく着飾り、平伏した。その傍らに琴が置いてあった。そしてオキナガヒメの背後に二人の宮女が額ずいていた。
「アダヒメ、懐かしい」
皇后は顔をあげて齢の変わらぬ義娘を見つめた。アダヒメは無言で座った。その背後にイナビとサヤ、稗田阿礼が立った。建内宿祢が戸を閉めた。
「皇后よ」
アダヒメが口を開いた。
「大王を誅したのは汝等か」
「吾はもはや皇后にあらず」
アダヒメは不快そうに僅かに視線を背けた。
「アダヒメよ。国栖で何を知った」
オキナガヒメは艶然と微笑み、問うた。アダヒメは答えなかった。オキナガヒメは稗田阿礼を見た。
「汝は史人であったな。稗田の家を訪なうたとき、見かけたことがある」

阿礼は僅かに瞬きした。
「稗田の乙女よ。汝は国栖で何を知った」
阿礼はアダヒメを見た。アダヒメはオキナガヒメの足元の琴を見つめたまま、身じろぎもしなかった。オキナガヒメは言った。
「大王家がまことの日輪の女神の末裔ではないと、知ったか」
阿礼は眼を見開きオキナガヒメを見つめた。イナビとサヤが顔を見合わせた。
「建内宿祢よ」
アダヒメが背後の老人に言った。
「汝は全てを知っているであろう」
建内宿祢は答えなかった。アダヒメは強く言った。
「汝の知ることを全て言え」
建内宿祢はイナビとサヤを見た。彼女らの腰に帯びたままの剣を見つめながら口を開いた。
「大王家は日輪の女神の末裔に非らず。さりながら、アダヒメとオキナガヒメ、二人の女人は日輪の女神の末裔」
アダヒメは振り向いて、老人を見た。老人は眼を伏せたまま続けた。
「わが建内の家は、ミマキの大王の来る以前よりヤマトに住まう。日輪の女神の末裔なるナガスネヒコはヤマトの王なれども、その性、脆弱にして酒色に耽り、民を顧みず、国の

財を散じる。ミマキの大王がナガスネヒコを滅ぼしたとき、建内の家はミマキの大王に味方した」
アダヒメは琴を見つめ続けていた。
「さりながら、ミマキの大王は性剛く謀に長けるも、徳なく、いたずらに民を圧迫するのみ。その子らも同様なれば、大王家の統べる世も長くはなく、いずれは外敵にか内なる敵にか滅ぼされると見た。さればナガスネヒコや土蜘蛛の子孫らを密かに匿い、その末裔を養うことにした。すなわちオキナガヒメの曾祖母はナガスネヒコの娘。そしてアダヒメの母タカノヒメはその妹」
アダヒメの瞳が僅かに揺れた。
「タカノヒメは、サオヒコやサオヒメと同じく、建内一族が密かに養い育てたナガスネヒコの末裔。タカノヒメが果して、大王とまぐわってアダヒメを生んだか、あるいは大王が疑っていたがごとく、異母兄のサオヒコとまぐわってアダヒメを生んだか、それは吾も知らぬ。しかしながらアダヒメもオキナガヒメも、同じナガスネヒコの血を引く日輪の女神の末裔。そして、そこに仕える宮女どもは、土蜘蛛の長アユメの末裔」
「アユメの末裔」
サヤは呻いて宮女たちを見た。宮女たちは顔をあげ、かすかに微笑んだ。
「この宮女ども、土蜘蛛の末裔たる武を忘れず。土蜘蛛の乙女として育て、武を鍛えせしめた。大王と彼に仕える兵どもを討ったのはこの二人」

建内宿祢はしばし口を閉じ、アダヒメの肩を見つめた。重たげに垂れた瞼の下で瞳が朧気な光を湛えていた。貌は見えずとも、かすかな肉体の動きでその心を読むのが、八十年を生きた謀臣の技であった。

「即ち、偽りの日輪の女神の末裔どもは滅ぼされ、まことの日輪の女神の末裔と、日輪の女神の末裔に仕える土蜘蛛と国栖がここに揃った」

建内宿祢はちらりとイナビに眼をやった。イナビの喉が微かに動くのが伺えた。

「世はナガスネヒコの昔に戻った」

建内宿祢は口を噤(つぐ)んだ。

「アダヒメ」

オキナガヒメが言った。

「吾とともに、再び日輪の女神の栄光をヤマトの地にもたらそう」

アダヒメは立ち上がった。オキナガヒメはアダヒメを見上げ誘うように微笑んだ。アダヒメは無表情にオキナガヒメを見下ろしていた。オキナガヒメは微笑みを納めた。かすかな脅えが走った。脅えは背後の宮女たちにも伝わった。額ずいたままの彼女らの手がかすかに動いた。懐に秘めた短剣の在(あ)り処(か)を確認しているようであった。

「オキナガヒメ」

アダヒメは言った。

「汝は、まことに自らを日輪の女神の末裔と信じるか」

オキナガヒメはかすかに眉を顰(しか)めたが、すぐに笑顔を作った。

「吾は生まれたときから、大王家が滅び、吾自らヤマトの民を統べる日を待っていた」

「では、汝はヤマトの民を如何に統べる」

「国を富ませ、版図を拡げる」

「如何ように国を富ませ、いずれに版図を拡げるか」

「海を越えた西の方に金銀・珍宝に溢れるクニあり」

オキナガヒメは立ち上がった。眼をぎらぎらと輝かせ、アダヒメを見つめた。

「水軍(みずいくさ)を起こし、西の方を攻め、吾がものとする」

オキナガヒメはアダヒメの手を握った。

「汝と吾が手を合わせ、土蜘蛛や国栖の軍を伴い攻めれば、西のクニは吾等がもの」

アダヒメはそっとオキナガヒメの手を押し返した。くるりと踵(きびす)を返した。

刃が一閃した。建内宿祢の体がゆっくりと仰向けに倒れた。血の匂いがたちこめた。

宿祢の首が室の隅に転がった。

宮女たちが懐の短剣を抜いて立ち上がった。

同時に、イナビとサヤが剣を抜いて立ち上がった。

「控えよ！」

オキナガヒメが背後の宮女たちを鋭く制した。その胸先にアダヒメが剣を突きつけていた。

「オキナガヒメ」
稗田阿礼が微笑んだ。
「吾等が国栖で何を知ったか、言おう」
オキナガヒメは阿礼を見つめた。
「ナガスネヒコは日輪の女神の末裔に非らず」
オキナガヒメの瞳が明らかに動揺した。
「力ある者、民を富ませる術を持つ者が民を統べる。アダヒメは日輪の女神の末裔としてではなく、力を以て国栖の王となり、ヤマトの王となった」
「小賢(こざか)しき建内の子よ」
アダヒメは口を開いた。
「西方のクニを欲するならば、女軍(めのいくさ)の兵長として吾に従え」
オキナガヒメはしばし眼を伏せ、やがて口を開いた。
「西のクニを攻め取ったときは、吾をその地の一大率とするか」
オキナガヒメの貌に微笑みが戻った。
「吾は、ヤマトの王であり国栖の王であるアダヒメの代官として見事に西のクニを治めよう」
「汝の戦ぶりを見て、決める」
オキナガヒメは頷いた。女たちは剣を鞘に収めた。

そのとき、アダヒメの顔が歪んだ。右手を口にあて、身を屈めた。苦しげに荒く息をして眼に涙を浮かべていた。女たちがいっせいに床に膝を着いたアダヒメに駆け寄った。
アダヒメは身籠(みごも)もっていた。
「オウスの胤(たね)であろう」
悪阻の床に伏したアダヒメは、傍らに侍した稗田阿礼に言った。
オウスの皇子はアダヒメを殺そうとして、殺された。死に際に放った精がアダヒメの体内でひとつの魂を生んだ。
その魂がアダヒメの体を離れ、物心がつくまでに育ったとき、アダヒメが抱いたような身を焦がす渇きを覚えるのだろうか。
「かの皇子は」
稗田阿礼は言った。
「アダヒメに似ていた」
アダヒメは口を噤み、腹のあたりを撫で、この子も、と口のなかで呟いた。
恐らく、オウスの皇子もアダヒメもほんとうに欲していたものは同じだったのだろう。だが、ヤマトの地を去って戻ってきたとき、欲していたものは既になかった。
オウスの皇子は、自ら望むようには生きなかった。今や淡海(おうみ)から南の国栖までを統べる大王となったアダヒメは、それが自ら望んだことであったかどうか。

王宮の外で慌ただしい兵のざわめきが響いていた。西征の準備が着々と進んでいた。国栖の海人たちが河内に集められ、千を越す兵を乗せて西の海を越えるだけの船を作りつつあった。

今は王宮を出ることもかなわないアダヒメに代わり、オキナガヒメが西征軍の指揮をとることになっていた。野心に溢れたオキナガヒメが、果してアダヒメの手足となって働くかどうかはアダヒメには分からない。

「阿礼。汝は全てを知った」

アダヒメは問うた。

「心は満ち足りているか」

「吾は人を死なしめた」

阿礼は俯いて寂しげに微笑み、己が掌を見つめた。

「吾が手は記すためにある。記すべき出来事をなすは王。偉大なるヤマトの女王よ。事をなせ。吾は、女王が地上に流す血の一滴をも逃さず字に書き記し、正しく後の世に伝えよう」

半年後。

難波の津を、千の兵を乗せた二百の船団が海に乗り出した。

金の冠をかぶり、いのちを宿して大きく突き出した腹に帯を巻いたアダヒメは女兵の助

けを借りて津の櫓に登り、船団を見送った。船上に整列した兵たちが高く掲げた千の矛が陽光を受けて輝いた。

（２００１年１月）